

防災歳時記 (41)

—元祖「集中豪雨の里」の水害記念碑—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮 澤 清 治

JR ホームに流れ着いた巨石

JR 京都駅から奈良線下り「みやこ路快速」に乗ると、約 28 分で玉水駅(京都府綴喜郡井手町)に着く。

井手町は、京都ロマン街道にあり、京都と奈良のほぼ中間に位置する。古くからひらけ、歌枕として多くの詩歌に登場し、橘諸兄、小野小町、後醍醐天皇にまつわる旧跡が多い。

玉水駅のホームに直径約 5 メートルもある巨大な石が展示してある。石の傍らに次のような説明板がある(写真 1)。



写真 1 駅ホームの巨石 (JR 玉水駅)

水難記念 昭和二十八年八月十五日南山城水害。それはこの町にとって忘れ難い悲運な記録である。

前夜来の雨は時間雨量百五十ミリを超える稀有の集中豪雨となった。そして暗夜の中に猛り狂った水魔は町も人も一瞬のうちに躁躍。一夜明けた町は百七人の犠牲者を含む無惨な受難地獄であった。

当駅も駅舎ホームは文字通り河原と化した。この石(6 トン)は東南約五百メートル先の玉川から押し流されてきたものである。

昭和五十六年一月十五日建立

玉 水 駅

南山城水害とはこうだ。

昭和 28 年 8 月 14 日深夜から 15 日未明にかけての集中豪雨により発生した南山城(京都府南部)での大水害。日本海から南下した寒冷前線が京都付近に停滞した。そこに沖縄南東海上にあった台風 7 号からの暖湿空気が流入し、前線が活発になって豪雨が降った(2000 年 9 月 11 日の東海豪雨のときの気圧配置と似ている)。

綴喜郡田辺町の府田辺土木工営所では、15 日午前 1 時 30 分からの 1 時間に 80 ミリの猛烈な雨が降り、前後 3 時間では 114 ミリ。また相楽郡和束村湯船では午前 0 時からの 3 時間に 200 ミリ、総雨量は 428 ミリに達した。豪雨はきわめて限られた範囲に

集中し、約 20km 離れた京都市内では遠雷は聞こえたが星空で、雨量はわずか 65 ミリであった。

井手町では 15 日午前 3 時すぎ、玉川上流の 2 つの農業用ため池“大正池、ニノ谷池”の決壊を知らせる不気味な町役場のサイレンが鳴った。町民は前夜遅くまで新仏を迎えて盛んなお盆の行事をおこない、夜半すぎ床に入った寝入りばなをたたき起された。サイレンの鳴り終わった瞬間、ゴーツ、バリバリと地鳴りのような激しい音をたて、みるみるうちに町は二本の激流に洗われ、巨石を先頭にした土石流に押しつぶされた。泥海の孤島となり、玉水駅、玉水郵便局は埋没、約 30 戸が流失した。被害は井手町を中心に府域の死者 336 人、損壊流失家屋 904 棟、床下浸水 2,851 棟。

「集中豪雨」という言葉は、このとき朝日新聞の 15 日付夕刊で「集中豪雨、木津川上流に」という見出しで使われたのが最初。

ないと思うな不時災難

JR 玉水駅の南隣りが棚倉駅(旧棚倉村、現山城町)である。この付近も古くからひらけたところで、縄文時代から弥生時代の平尾城古墳、涌出宮遺跡などがある。駅前の観光案内板には、これらの古墳、遺跡のほか、平尾と北河原の 2 つの水害記念碑が表示されている。

平尾水害記念碑(塔)は、玉水・棚倉駅の中間にあって広い田んぼの中に、ひっそりと樹木に囲まれている。碑文に次のようにある(写真 2)。

ないと思うな不時災難



写真 2 平尾水害記念塔

昭和二十八年八月十五日未明、南山城地方を襲った未曾有の大豪雨により天神川・不動川の堤防は崩壊し、田畑は砂礫泥の惨たる荒原と化す。同年十月これが復旧に立ち住民不屈の協力により同三十四年五月工事全く成る、同年八月これを立つ、耕地二七八反、水路七〇九五米、道路三二四七米

南綺田耕地整理組合

頭職者府会議員玉置一徳、山城町長ほか旧棚倉村・旧高麗村は、木津川支流の天井川の破堤によって大被害を受けた。不動川は 2 か所で破堤し、河床下に位置していた北平尾地区の集落が鉄砲水の直撃を受け、24 人の犠牲者を出した。天井川の破堤は、まるで頭の上から激流が落下してくるようなものだ。

流出土砂量もきわめて多く、石コロと赤土が田畑を埋め、JR 奈良線が天井川下を横断するトンネルを埋めてしまうほどだった。

大水害から半世紀たった今、歴史的な遺跡のふるさとの中に災害の跡がところどころ残っている。朝な夕なにこれらの“災害史跡”を見ると、過去の災害の風化を防ぎ、減災への心構えがいやおうなしに高まする。まさに“百聞は一見に如かず”だ。災害の跡を守っている JR、地元関係者に敬

意を表するとともに、これらを次世代に語り継ぎたい。